部長の挨拶　中條教授

閉會之辭　太田幹事

十一月三十日

會場　靜岡縣川崎町法光寺　本學院出身小屋舜正師住職）

出張者　辯士　高二　太田純志君

高一　福島瑞岳君

中四　原智琥君

技師

以外に登山參拜團及青年團に對し講演布教せし事數多今は悉皆列記するの余裕なければ略す。

終りに先輩並に有志諸彦の御後援と會員一同の熱誠とを以て講演部の益々隆盛發展の程を切望す。以上（鳴月記）

文學部から

過去を救ふ事を知つて未來を救ふ事を知らぬものや、未來を救ふ事を知つて現在を救ふ事を知らぬやうな諸種の宗教團體が、雜亂の地上に所夾まきまで列べられて居る、人心救濟、生活改善、社會浄化、此等が宗教運動の目的であり理想であるならば、今後の宗教家は人類主義に徹せる信愛を表寥しなくては、光り輝く宗教生命には觸れ得ない。伽藍佛教の獨禪寂主義は像法過時の遺物、個人解脱の自利的行動は正法時代の化現である、今にして吾々青年宗教家が自覺しなかつたら、共々に「冥さより闇きに入る」としたならば、人間は畢に動物以外の何物でもない、神や佛がそが寵兒として何の爲めに理智を與へたのであろう、上有頂から下奈落に住む吾々の心は本來本有の眞理ではないか、そこに確かに沈んで居るのは宗教の眞髓ではあるまいか、その法性をしつかり握り得た人々こそ佛陀であり聖人である。「法は人に依つて榮える」そうだ宗教は人に依つて現はれ、人に依つて培はれ、そうして人を養ふてくれるものだ、現代に於て其の表現方法に二方面がある。一は辨論と、一は文筆である、今辨論の價値を云々する場合ではないが、批判は對立的にせねばならぬ、姑息な見解かも知れぬが、辨論は横に空間的（十方）の所產で空のもので、文筆は竪に時間的（三世）のもので有である、然らば存在と價値に於ていづれが時代を大多に支配し活動し進化し行くか時と場合に依つて其の優劣は決し難きも、其の根本は文筆に依つて價値づけらるゝ事は明白なる事實である。會員諸君が祖山の辯筆を自らほこるの慨はあるが、はたしてそれが人間精靈の奥扉を開き得るか、辨と文とは或点まで一致と同理を認めねばならぬ。然るに此の棲神はどうが、余りに紙上を醜くするやうな苦言は爲し得たくない、只校正の不備と編輯の不振とを謝し、追々と諸君の努力と奮闘を祈るばかりである。

毎月寄送して下さる書籍雜誌等を、一同熱心に拜見して居るから其の御芳名を錄し、虔みて謝意を表しよう、大崎學報（日蓮宗大學殿）、天業民報（天業民報社殿）、日宗新聞（日宗新聞社殿）、身延教報（身延教報社殿）、雄辯、太陽、中央公論、現代、解放、改造、望月軍四郎殿）、唯一、覺醒（大日本覺醒團殿）、三寶（森江書店殿）、宣明庵（日蓮妙龍會殿）、閉の敎（京城閉敎社殿）、信友會月報（信友會月報部殿）、あさひ（大阪あさひ社殿）、傳道（大阪傳道閣殿）、開顯（天業民報社殿）、微妙（大阪顯正護國會本部殿）、東海中正新聞（佐藤天洲殿）、香川日報（黑澤松南殿）、購讀雜誌の中に無礙光、合掌、法華、中學生、中學世界、佛教學雜誌、第一義、宗報、密宗學報、佛教研

究、六條學報、中外日報、宗教の藝術、民衆公論、文藝通報、中央佛教、佛教倶樂部、清流、文化生活等である、斯く内外に亘つて居るからには圖書室のみに於ても、一角のもの知りと成り得ると思ふ大いに勉強してくれ給へ。（赤童）

運動部から

新しい時代を造るには、新しい活動が必要である。新しい活動の盛んな國は、いつも新しい方面に發展しつゝある國である。それと同樣に、運動も又時代と共に歩調をそろへて進む可きものである、故に新しい時代の新しい運動は、其の時代を形造る處の人間の力強い心の發動である。

近時吾國に於て各種の運動が、世界の先進國に亙して進歩しつゝある事は、國際的にも、社會的にも、將又國家隆盛の上から云つても、眞に喜ぶ可き現象である。「健全なる精神は健全なる身体に宿る」とバアナードショウが云つたように、如何に高遠な理想、抱負を以てゐても、それに伴なわない肉体を持つてゐては、到底現實への道程に登る事は出來得ないと云ふ事は自明の事である。

吾々青年宗教家の卵子が將來自覺せる宗教家の一員として、復雜な社會の表面に立ち、混沌として渦卷き流るゝ思想海に浮沈しつゝゐる時代の人心を救濟するには、自分自ら其の渦中に拔手を切つて進んで行くと云ふ覺悟がなからねばならぬ、其の覺悟である以上身体の强健と云ふ事は片時も忘却してはならぬのである。此の意味においてか、吾祖山學院にも近頃非常に運動熱が頭を擡げて來たと云ふ事は當部に於て最も喜びとする處である。□各部の中でも劍道部が一向振はないのは殘念だ、それにはこうした靈山に餘り烈しい擊劍の音がするのはどうかしら……と云ふ懸念もあり、一つは時代思潮の餘波が此の山の奥にも流込んでゐるせいでもあらう。周圍の事情や還境に支配される必要はないから遠慮なくやつてもらいたい。□弓術部の方は反對に非常に盛になつて來た、大正の奈須與一を以て自任してゐる連中が廿人以上も居るから素晴らしいものだ、何時行つても五七人引張つてゐない時はない、それと云ふのは以前の矢場のように矢の藪入の慮ひが全然なくなつたのと、地方に弓術が盛になり競技に出かける者が多くなつて來たせいでもあらう。カラリと晴れた青空の下で滿月の如く張つた弓の矢が弦を離れた瞬間―靜かな空氣の中を直つしぐらに、的に當つた刹那は、若い青年の血潮に詩的なそうして何と云へないデリケートな氣分を起させるからナア。□庭球部は何と云つても、吾運動部のオーソリティだ、毎日白熱的な猛練習を續けてゐる、シングルもやればダブルもやる、殊に昨春以來峽南庭球大會が所々に開かれ、其の都度出馬するようになつてから一增猛烈になつて來た。が目下廿人餘りのプレーヤーの專有物かのようになつてゐるが、これから未熟者もドシ〳〵やつてもらいたい球拾ひの半年もやつてゐる間には少しはウマクなる。兎に角毎學期一回宛の弓術及び庭球の大試合が一回毎に盛大になり且つ技術が熟達してゆくのは喜ばしい、本年度の初試合までには第二コートを是非共完備するつもり諸君の努力を望む。□五月廿四日會則第十條に準じて五泊四日間の豫定で中山、東京、日光方面に修學旅行に出かけた（別記事參照）十月廿七日には、學制令發布第五十記念の陸上大運動會が開催された、式後直に運動にかゝつた、時に九時ー